

国際交流基金助成事業報告書

薬学部 2年次生 H.S

1) 渡航前に考えていた自分の目標

ホストファミリーや現地の人と積極的にコミュニケーションをとるようにして、英語力を高めることと、どんな場面であっても積極的に活動し、自分の考えを相手に伝えられるようにする。また、人に頼る前に自分で考えて行動し、自発的に物事を行えるようにする。

2) 目標は渡航後どうだったのか

現地では、特にホストファミリーとコミュニケーションを取ることや、お店でも翻訳機を使用せず、多くの場面で英語に触れ、英語力を渡航前よりも高めることができたと思う。英語をほとんど話せない中でも、疑問に思ったことは積極的に質問し、英語で伝わりにくい場合でも簡単な表現に言い換える努力を行い、自分の意見を伝えられたと思う。また、今回の研修では一人で行動する場面も多く、その中で自分が持っている情報と周りの情報を照らし合わせ、自分のすべきことを考えて実行するというところまでできたと思う。

3) 語学学習

今回の研修期間中は、平日にはグリフィス大学で医療に関する英語の授業を受けた。授業は基本的にグループワークで、コミュニケーションをとりながら進めていくものが多く、医療現場で使用する英単語やフレーズを使った対話のスキルを学んだ。また、VRゴーグルを使ってバーチャルの患者さんと実践的なコミュニケーションの練習を行い、VRコンテンツを用いた臨場感あふれる世界を体験した。



写真1 VRコンテンツ



写真2 授業でのグループ学習

4) 交流体験

オーストラリアで過ごす中で、最も交流があったのはホストファミリーであった。ホームステイ先では、できる限りリビングにいるようにし、ホストファミリーとの時間を大切にしたい。また、ホストファミリーとは、一緒に夜ご飯作り、食後のティータイムやお散歩の時間を通して最も多く会話をした。ティータイムには、バルコニーで紅茶を飲みながら、そこから見えるものや、オーストラリアについて、さらには宇宙に関する話もした。初めて聞く話や詳しくないことの話聞いたため、わからない単語が多く出てきたが、ホストファミリーに質問すると詳しく説明してくれた。また、お散歩では英語を話すことが苦手と伝えると日常で使う単語の発音レッスンもしてくれてとてもいい経験ができた。



写真3 家庭料理



写真4 ティータイム

5)渡航先について

オーストラリアの三月の気候は、日本とは逆の夏の気候であった。しかし、日本の夏に比べて乾燥していて、夜の気温は下がり寒かった。食生活は、オーストラリアの独自の料理は少なく多国籍料理であった。特に、ハンバーガーやメキシコ料理が多い印象を持った。生活環境は、日本と変わらないことがほとんどであるが、オーストラリアが慢性的な水不足であるためシャワー時間の短い家庭が多いと感じた。公共交通機関については、トラムという路面電車、電車やバスが主な移動手段であり、どれもクレジットカードを使って利用することが可能で、簡単に利用することができた。



写真5 カランビンビーチ

6)これからの自分

今回の研修で、新しいことに挑戦するという行動力と、どんな状況であっても前向きに行動するということができるようになったと思う。したがって、これからはオーストラリア研修で得た経験によって、新しく興味が湧くことに対し行動を起こし、積極的に活動していきたいと思う。また、研修期間中、英語力に関してはかなり足りていないと感じ、悔しい思いをする場面も多くあった。帰国した現在、薬学の勉強が忙しい中ではあるが、時間を見つけて日々努力を積み重ね、上達していけるようにしたいと思う。